

日向薬事始め (その11)¹⁾

— 日向における蘭方医術の嚆矢者、岩切芳哲とその周辺 —

山本 郁男^{1a,2} 宇佐見 則行^{1a,2,3} 程 炳鈞^{1b} 岸 信行^{2,4}

Historical Studies on the Origins of Pharmaceutical Sciences in Hyuga (Miyazaki) (Part 11)
— On Houtetsu Iwakiri as the Pioneer who Spreaded the Dutch-Medicine in Nobeoka
(Hyuga) during the Edo-Period

Ikuo YAMAMOTO^{1a,2} Noriyuki USAMI^{1a,2,3} Cheng Bing Jun^{1b} and Nobuyuki KISHI^{2,4}

Abstract

This paper deals with Houtetsu Iwakiri who developed the Dutch medicine in Hyuga (Nobeoka), Miyazaki during the Edo-period. Houtetsu Iwakiri was born at Ifukugata, Nobeoka in 1730 as the third boy among three brothers. When eighteen years old, he went to Nagasaki to learn Dutch-medicine under the first, Eitetsu Narabayashi for four years. In 1752, Houtetsu Iwakiri came back to Nobeoka and became to be a medicinal doctor of the Naito clan, Masaki Naito. It was called that Houtetsu Iwakiri was the pioneer who spreaded the Dutch-medicine into Hyuga (Miyazaki) during the Edo-period. He was dead as 71 years old in 1800.

Key words : Dutch-medicine, Houtetsu Iwakiri, Nagasaki, Eitetsu Narabayashi, Nobeoka, Edo-Period

キーワード : 蘭医学 岩切芳哲 長崎 榎林榮哲 延岡藩 江戸時代

2011.11.24 受理

緒言

著者らは、これまで江戸時代を中心とする日向各藩、特に延岡藩、高鍋藩、佐土原藩、飢肥藩における医薬の発展の歴史の変遷を新しい角度から眺めた結果、ここ延岡の地に、医療、保健、福祉を学び、研究する本学が開設された濫觴は、安政4（1857）年、延岡城下南町（現在、延岡市南町、市役所前公園附近）に医学教育機関、「明道館」の開設にあるのではないかと示唆する報告²⁾を行ってきた。

本報では、17世紀の初頭より、輸入された蘭学が日

向では何時頃より流行したのかを歴史的にまとめようとしたものである。その結果、日向の蘭学の始めは、長崎にて榎林鎮山の孫にあたる榎林榮哲（初代）に蘭学を修得した岩切芳哲であることが分かった。彼とその周辺を報告する。

日本における蘭学の歴史

わが国に蘭（オランダ）学が何時頃、輸入、導入されたかについては異論のあるところと考えられるが、著者らはオランダとイギリス両国の貿易地として平戸と長崎

¹⁾九州保健福祉大学 薬学部^a 衛生薬学講座、^b 東洋医薬学研究室 〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町1714-1

²⁾九州保健福祉大学QOL研究機構 〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町1714-1

³⁾奥羽大学薬学部分析科学研究室 〒963-8611 福島県郡山市富田町字三角堂31番1

⁴⁾宮崎・日向・富高薬局 〒883-0014 宮崎県日向市原町3-6

^aDepartment of Hygienic Chemistry, ^bLaboratory of Chinese Medicine, ¹School of Pharmaceutical Sciences, Kyushu University of Health and Welfare 1714-1 Yoshino-machi, Nobeoka-shi, Miyazaki, 882-8508, Japan

²Quality of Life Research Institute in Kyushu University of Health and Welfare 1714-1 Yoshino-machi, Nobeoka-shi, Miyazaki, 882-8508, Japan

³Laboratory of Analytical Sciences, School of Pharmaceutical Sciences, Ohu University 31-1 Misumido Tomita-machi, Koriyama, Fukushima, 963-8611, Japan

⁴Tomitaka Pharmacy, 3-6 Hara-machi, Hyuga, Miyazaki, 883-0014, Japan

に決定していた慶長14 (1609) 年とみる。何故なら平戸では、長崎奉行所、上使 (江戸幕府から諸大名に上意を伝えるために派遣された使者) であった井上政重は自身の疾病治療を平戸のオランダ商館医に診てもらっていたことからである。一方、その後、イギリスは平戸を引き上げたため、オランダ国との開港は長崎 (出島) のみとなり、事実上、蘭国と唐 (明) 国の二国との交流となった。したがって、出島が完成した寛永11 (1636) 年を日本蘭学の初年にあてる考え方もある。

出島開港後、出島の商館医と通詞 (通訳) を通じて蘭学 (ここでは蘭方医術と同義語とする) がわが国に広く浸透していったことは周知の通りである。慶安2 (1649) 年、出島にオランダ人、商館医カスバル・スハンベルヘンが来島、日本人青年4人に幕府の許可を得て蘭方医術 (紅毛医術ともいった) を教授したことから、この年、1649年を蘭学導入年という説もあろう。このカスバル流外科は猪股伝兵衛、河口良庵らに伝授された。承応3 (1654) 年、向井元升は蘭通詞・西玄甫の助力によって、蘭医アンス・ヨハン・スティベルらの指導の下、「紅毛流外科概要 (全七巻)」を著すなど、着々と蘭方医術が次第に全国に広まり、多くの若者が長崎を目指して来るようになった。ここで通詞 (通訳者) について簡単に述べる。外国人の交流ではまず言葉の問題があるが、蘭学においてもしかり、長崎における蘭通詞の活躍は目に余るものがあった。すなわち、蘭通詞はオランダ人と日本人との通訳をしながら、自らは医術を学ぶものが少なからずいた。榊林流外科、栗崎流外科などはいずれ通詞に発している。外国語に長けるが故に頭脳的にも優秀であったのであろう。この通訳者の呼び名として、蘭語では通詞、南蛮 (ポルトガル、イスパニア) は通辞、唐国においては唐通事と呼んだ。表-1 に江戸時代の出島の蘭通詞、表-2 に蘭商館医を記す。蘭商館医は歴代あわせて63名であった³⁾。商館医の主要な業務は商館で働く使用人の健康管理や日本人との折衝、文化交流、さらに情報収集であったものの、24時間これに従事するのではなく、暇をみては日本研究に精を出す者も少なくなかった。特に、植物、鉱物、温泉など広く博物学に興味を示した。事実、オランダ東インド会社 (バタビア、現在のジャカルタ) における日本への商館医の募集の際、極東アジア、日本に興味ある者とされていたらしい。17世紀以後、出島商館医として来日した者は、必ずしもオランダ人だけではなかった。その内訳は、オランダ人32名、ドイツ人15名、イギリス人8名、スウェーデン人1名という報告がある^{3,4)}。

ところで、蘭学という言葉が定着したのは、かなり後

表1 江戸時代の出島蘭通詞

和年	西暦	氏名	事項
寛永11	1634	西玄甫	南蛮通辞でもあった。
寛永18	1641	沢野忠庵	ポルトガル生まれ、元イエズス会日本布教長。フェルイラの帰化後の日本人名。宗門目明、天文学、医学を向井元升に伝授。幕医。
延宝8	1680	本木良意	蘭通詞でありながら初めて蘭医学研究を行う。解剖図の翻訳。
元禄元	1688	榊林鎮山 栗崎道有正羽	榊林流外科創始者。パレ外科全書翻訳。 栗崎道喜以後の栗崎流外科を継承。
元禄4	1691	吉田白庵 北山寿庵 荆田甫庵	漢・蘭両方の通 (事) 詞。後に松浦藩医となる。
寛政元	1789	吉雄耕牛	
文政5	1822	猪股伝次右衛門 子潮 吉雄吉次郎吳洲 吉雄権之助如淵 中山武徳	蘭日辞典、長崎ハルマ。

表2 江戸時代の蘭商館医および明治政府招聘医

和年	西暦	氏名	特記事項
慶安2	1649	カスバル・スハンベルヘン	蘭館医の最初、カスバル流外科
承応3	1654	アンス・ヨハン・スティベル	紅毛流外科概要 (全十巻) 著す。
寛文2	1662	カツ	
寛文3	1663	ダニエル・プリン	
延宝2	1674	ウィレム・テン・ライネ	
天和2	1682	ジュージ・マクステル	
元禄元	1688	ウィレム・ホフマン	
元禄3	1690	エンゲルベルト・ケンベル	ドイツ人、五代将軍・徳川綱吉に会う。 出島薬草園。2年間滞在。蘭通詞達に医学・薬学・植物学を教授。「日本薬物誌」を著す。 スウェーデン人、わが国の植物を調査研究。
安永5	1775	カール・ペーター・ツコンベリ	
文政元	1818	クラッセ・ハーヘン	
文政5	1822	ニコラス・チューリンク	鈴木春山の師。
文政6	1823	フィリップ・フランツ・クオン シーボルト ハインリッヒ・ヒュルガー	1度目の来日。翌年、鳴滝塾。 ドイツ人、医学、博物学を教授。 日本に来た初めての薬剤師。
嘉永元	1849	オットー・G・J・モニッケ	聴診器を持参。牛痘菌。
安政2	1855	ファン・デン・ブルック カツデンディーチ・ボンベ	松本良順、緒方惟準、長与専斎の師。
安政6	1859	シーボルト	2度目の来日。
文久2	1862	A・Fボードウィン	
慶応2	1866	マンスフェルト	北里柴三郎の師。
明治2	1869	ウィリアム・ウィリス ハラタマ アーネスト・サトウ アントン・ヨハネ・ゲールツ	高木兼寛の師。 長崎分析研究所教官。 日本薬局方草稿者。
明治6	1873	ウィリアム・アンダーソン	英医。

の18世紀の後半で、長崎ではなく江戸である。杉田玄白 (1733-1817) による「蘭学事始め」にこのことが記されている。すなわち、「このように、この学問は江戸で創始され、仲間で、誰云うことなく「蘭学」という新しい名ができた・・・」、安永3 (1774) 年のことであった⁵⁾。「解体新書」の完成をもって、蘭学は確立されたとみてよからう。

幕府は、表向きは寛永12 (1635) 年の鎖国令のため、オランダ人といえども敬遠して、従来の漢方医を立てていたが、外科、眼科、産婦人科は、蘭方医術にかなわなかった。しかしながら、本当の意味での蘭学の定着は、シーボルトの来日、鳴滝塾の開設以後である。否、もっと正確にいうなら、シーボルト事件*1後ともいえる。何故ならば、事件後、幕府は嘉永2 (1849) 年、「蘭方医

禁止令」を出したが、漢方医の効き目は最早なく、この年に皮肉にも牛痘接種法が長崎で成功。さらに、將軍、徳川家定の大病を漢方医では治せず、蘭方医によって治癒したことから、遂に、伊東玄朴のように蘭方医が奥医師に任ぜられる様にもなった。安政5（1858）年には、「蘭方医解禁令」が出され、先の「禁止令」は解かれるに至った。この頃は、江戸蘭学は、坪井信道を筆頭にして、宇田川玄真、中天遊らが活躍。一方、京都、大坂では小石元瑞、新宮淳庭やシーボルトの弟子である日野鼎哉、緒方洪庵が一派をなした。この時、日向出身の検本源吾（佐土原藩）が重要な役割を果たしている。

以下は「蘭方医禁止令」と「解禁令」である。

〔蘭方医禁止令〕	〔蘭方医解禁令〕
近來蘭學醫師追々相増世上にても信用いたし候もの多有之哉に相聞候右は風土も違候事に付御醫師中は蘭方相用候儀御制禁被仰出候旨御意堅く可被相守候	和蘭醫術の儀先年被仰出候趣も有之候得共當時萬國の長たる所を御採用被遊折柄に付奥醫師中も和蘭醫術兼學致候て不苦候事
但し外科眼科等外治相用候分は蘭方參用致候ても不苦候	安政五年七月三日
嘉永二己酉三月十五日	久世大和守
阿部伊勢守	

図1 「蘭方医禁止令」と「蘭方医解禁令」

このように、18世紀は、洋書輸入緩和、解体新書の刊行など漢蘭折衷医学と蘭学が興隆した時代であった。

日向の蘭学の歴史

日向の蘭学を語るには、長崎の蘭通詞の働きを見逃す訳にはいかない。天文21（1552）年、ポルトガルの外科医ルイス・デ・アルメイダが日本に渡来し、豊後（大分）に初めて病院を設立した。これが南蛮医学である。ポルトガル、スペインは、日本の植民地化の意図があるとして、豊臣秀吉は禁教令を発し、続いて徳川時代は鎖国の道を辿る。アルメイダの同時代、フランスの外科医アンブロアス・パレ^{*2}の外科書が蘭訳書として日本に持ち込まれ、蘭館長から幕府に献上、これは後に蘭通詞で

あった榊林鎮山によって訳出された。この頃、同じく通詞の本木良意が延宝8（1680）年、西洋解剖図の翻訳も行っている。こういうこともあり、蘭学塾が漸増、長崎にも九州各藩の医家が出島や元禄2（1689）年開設の唐人屋敷に最新の情報を集めようと詰めかけた。その中の一人に、以下で述べる日向からの岩切芳哲がいたのである。芳哲が師事した榊林家の祖について若干記述する。

蘭医学のベテランでもあった榊林鎮山⁶⁾

前述のように通詞は、蘭通詞と唐通事があり、通詞と字が違っていた。通詞（事）は単なる通訳者ではなく、奉行の下での貿易業務、外交技術、その他諸事方端に従事する。特に蘭通詞はオランダ商館で通訳、貿易業務の他、オランダ船が入港した時、船長から提出される書類の解説、解説文章の作成をするなどの業務を行っていた。通詞は江戸初期から結婚は縁戚関係で占められ、世襲制。幕末までに吉雄、石橋、榊林、中山、本木など三十数家があった^{3,4)}。

榊林鎮山は、慶安元（1649）年、長崎に生まれ、江戸時代前期の蘭（語）通詞（大通詞）であり、医師でもあった。諱は時敏、法号は栄林、通称は彦五郎、新右衛門、新五兵衛、得生軒、号が鎮山。父は、榊林重兵衛（新名、重右衛門）（寛永3（1750）～享和元（1801）年）。子（二男）に栄久がいる。複雑で史料によって一部不明な点もあるが、図-2 榊林家の系図を記しておく。9歳よりオランダ語を学び、19歳にして出島に出入りする300名による試験に合格、小通詞、39歳の時、大通詞。オランダ商館長の江戸幕府謁見に、8回も通訳者として同行。また、この期間、彼は商館長及び商館医より蘭方医学を修得。ところが、元禄11（1698）年、突如オランダ人との内通の疑いをかけられ閉戸に処せられ、通詞を解任。その後、許されるも通詞を辞め、医師として開業。多くの門人を育てた。パレの著書を翻訳出版したことは前述の通り。本書の序文は貝原益軒。その後、黒田綱政（福岡藩主）、徳川綱吉（將軍）の招聘も咎人であるとの理由でこれを辞退している。

* 1：シーボルト事件とは、文政11（1811）年に、シーボルトが初めての帰国の際、たまたま襲来した台風のため、長崎港沖で船が座礁、この時、船内に葵の紋服と烏帽子が発見され、禁制品であることから関係者が処罰された。四大眼科医、日本最初の白内障治療医で有名であった土生玄硯（1762-1848）がシーボルトからハシリドコロをベラドンナの代用とする散瞳薬の使い方を教わった御礼として、徳川第11代將軍、徳川家斉から拝領した禁制品の品々をシーボルトに贈ったことにより、土生玄硯は禁固刑。また、オランダ地図と交換のため、実測の日本地図を贈った高橋景保、間宮林蔵、さらに、関連した高野長英、高良斉、伊東玄朴、伊藤源三郎などもきつく幕府に問い質された。

* 2：近代医学の父といわれるフランスの外科医。解剖学、産科学、伝染病学に詳しい。

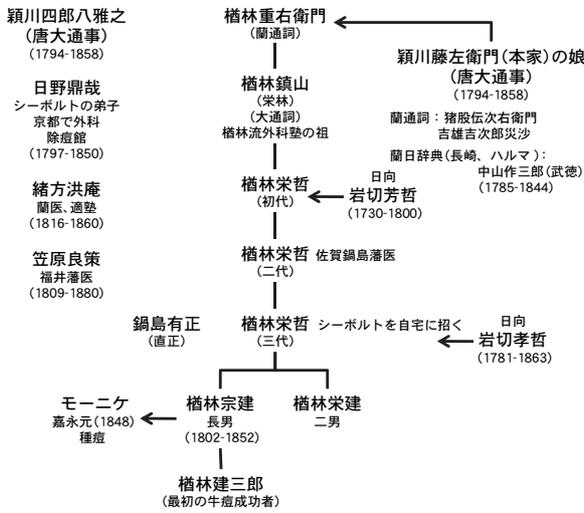


図2 榎林家の系図

岩切芳哲が門人となった榎林栄哲は、初代である。元文2 (1737) 年、長崎に生まれ、寛政9 (1797) 年没、60歳。秘伝書に描かれていた外科治療の様子や手術器具を写した「西洋医術図巻」を著す。長崎の鍋島屋敷に入りし、佐賀、鍋島藩との関係を深める。岩切芳哲の養子、岩切孝哲が師事したのは三代栄哲 (享和2 (1802) ~嘉永5 (1852) 年、50歳没) であるが、彼は、文政6 (1823) 年、渡来のシーボルトを自宅に招いて、長男、栄建、二男、宗建にじかに医学教育をして貰った家柄であった。初代、榎林栄哲は、寛政3 (1791) 年、蘭方医として初めて佐賀藩医として抜擢されている^{3,6)}。

さて、日向の蘭学は、岩切芳哲が18歳で長崎に行き、4年間学んだ後、帰郷し、1752年、71歳で没している。芳哲の指導下で約50年間、延岡藩で蘭方医学が発展していると考えられるが、何ら史料がない。享和2 (1802) 年、五代、内藤政順の時、岩切孝哲 (岩切芳哲の養子、白瀬淡郷) を藩費で長崎に派遣している。この頃、天然痘が流行している、種痘術を学ぶためと思われるが不明である。

岩切芳哲は、延岡、伊福形に享保15 (1730) 年、三人兄弟の季子 (三男) として生まれる。諱は正信、号が芳哲、先祖はこの地の豪族であった土持氏 (県城主 (松尾城)) に仕えていた。天正6 (1578) 年、豊後の大友宗麟に土持氏が滅されたので、伊福形に隠棲。代々農を営んでいたが、数代を経て岩切新右衛門となって生まれた子である。兄二人は一生を農業に従事したが、芳哲は幼い時より聡明かつ明敏で、四書五経など読書に努めた。幼時に「人間として生まれたからには、草木のように朽ちるのは、潔しとせず」といったという。既述のように、18歳の時に長崎の蘭方医、初代榎林栄哲について、4年

間オランダ医術を学ぶ^{7,8)}。

この初代榎林栄哲は通詞であり、蘭医でもあった。榎林鎮山の孫にあたる。岩切芳哲は宝暦2 (1752) 年、長崎より帰郷、丁度帰った時、25歳にして藩主である内藤政樹が病気で、これを見事に治したため一躍有名となった。このことにより、名医の名を欲しいままにしたとの記録が残っている。

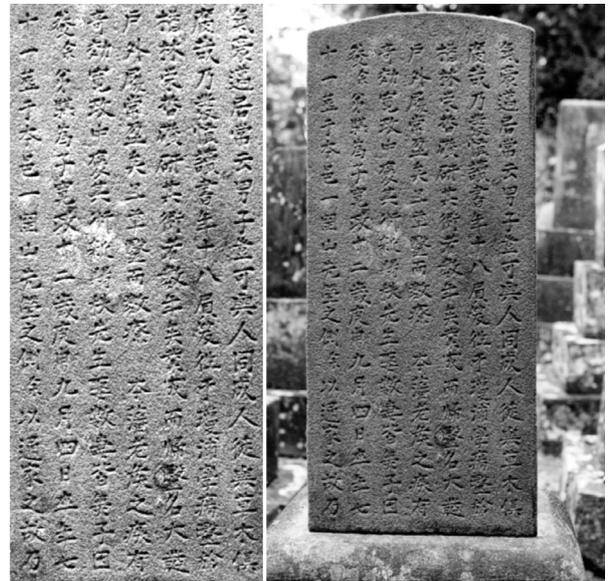


図3 岩切芳哲の碑文

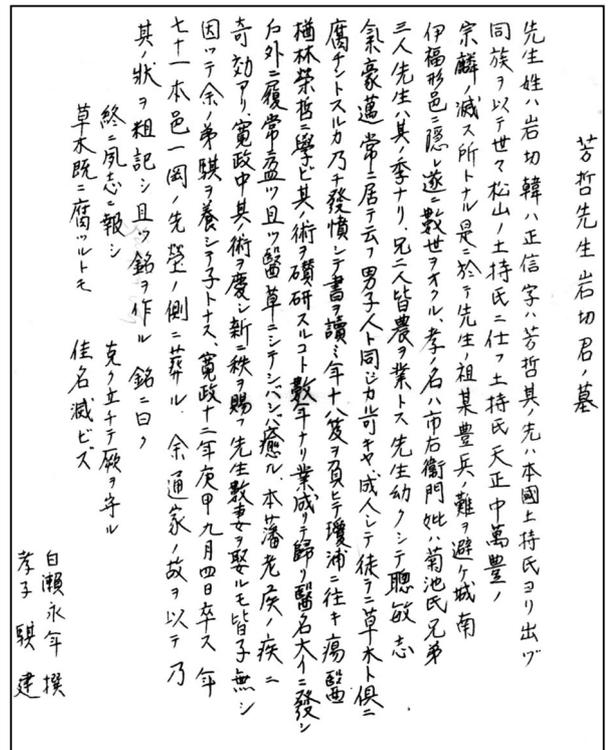


図4 岩切芳哲の碑文の記

芳哲は寛政12（1800）年、71歳で病没。その墓地は延岡市伊形町一ヶ岡にあったが、最近、墓石の破損が著しいため、近くの永覚寺（図-8）に一族墓として合葬されている。墓石は図-5に記すが、白瀬永年の碑文で養子の岩切孝（孝哲）が建立している。岩切芳哲を日向の蘭医術の嚆矢者として見出したのは松田仙峡であり、この根拠は図-3、4、5に示す墓石碑文によっている⁷⁻⁹⁾。

その後、同じく長崎に蘭医術を藩費にて三代目の榊林栄哲門下に28歳にして行ったのは、岩切芳哲の弟子、岩切孝哲である。孝哲は帰延後、侍医として従事、門弟を育成、名声を得ている。恐らく、この時期が延岡が最も蘭学が流行、定着したと考えられる。文久3（1832）年、83歳で没す（図-5）⁷⁾。



図7 岩切芳哲の墓

に岩切家家系図を示す。岩切孝哲の墓（旧）は図-7に示す。孝哲の墓は父芳哲と同じ伊形一ヶ岡にあったが、最近になって永覚寺に合葬（図-8）されている。現在は、養鶏場を手広く経営する岩切四方治夫妻（図-9）が直系として岩切家の墓を管理している。

日向の蘭学の発展の貢献者として前述の岩切芳哲、岩切孝哲を挙げたが、時代は下るものもう一人検本源吾がいる。しかし、24歳という若さで戊辰戦争に従軍、戦死している。検本源吾は、天保10（1839）年、佐土原藩、侍医、検本洞吾を父として佐土原高麗町に生まれる。幼少の頃は、藩校「学習館」にて和漢を学び、安政4（1857）年、父と共に江戸に行き、鈴木春山、尾本公園、坪井信道の蘭学塾に学ぶと同時に、安博堂や日習堂で広瀬元恭らと塾頭を務めている。文政6（1859）年、大坂に出て緒方洪庵について蘭学をさらに究める。文久3（1863）年、一時帰郷し、佐土原藩侍医となるも慶応2（1866）年、何を思ったのか戊辰戦争に従軍。医者であったが、監軍（部隊長）として働き、越前→越後→会津→若松と転戦したが、前述のように若くして戦死。もし、佐土原藩に落着いていたら、さぞかし佐土原藩の医業に大いに貢献したと考えられる惜しい人材であった。

日向の蘭学の嚆矢者は最初長い間、岩切孝哲と考えられていたが、前述のごとくこれは松田仙峡氏によって岩切芳哲の碑文によって明らかになった。その誤った根拠を以下に述べる。

ここに、明治、大正、昭和三代に亘る延岡を語る座談会記録—延岡市立図書館、昭和25年版がある。小嶋政一郎、石川恒太郎、香春健一氏など、そうそうたる郷土歴史家の集まりである。この79頁に「岩切さんの養父さん。この人が長崎に行って、和蘭（オランダ）医学を学んでこられたのです。横文字が墨で書いてあったが、

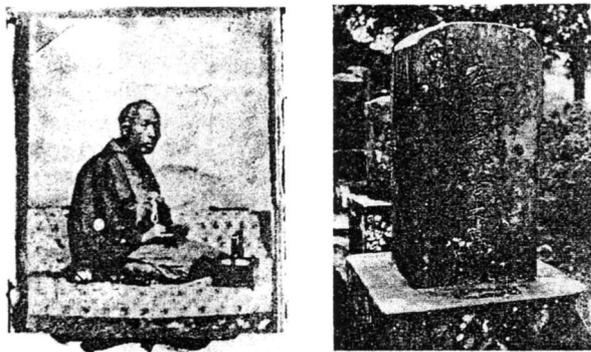


図5 岩切孝哲像（白瀬 騏）

岩切孝哲（1781-1863）は、実は延岡藩医、白瀬永年の実弟である。白瀬家には三人の兄弟があり、白瀬騏という末弟であった。年にして岩切芳哲の弟子となっていたが、芳哲には男子がいないこともあり、後に養子となり、入籍。代々医家であった岩切家を継いだ。図-6

岩切家の系図

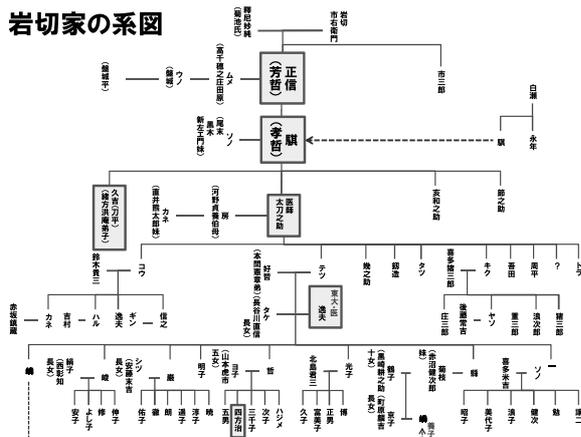


図6 岩切家の家系図

われわれは一つも読めませんでした。」「その人が岩切孝哲じゃなかったですか。そうです榊林榮哲という長崎の蘭医に学んだのです。」「この人が延岡の蘭医のはじめです。われわれみたいな開業医です。延岡の病院というのは岩切さんがつくった延岡病院がはじめて、明治40年頃です。」(原文のまま)¹⁰⁾ この様な話もあるので、恐らく誤って伝承されたのであろう。確かに長崎の榮哲といい、岩切芳哲や孝哲などと紛らわしい姓名も災いしているかも知れない。



図8 永覚寺



図9 岩切四方治夫妻(平成9年撮影)

次いでながら、明治の中頃の延岡の医家はわずか10名くらい、河野、岩切、四倉、百谷、山崎、松本、赤須、早川、片寄、黒木。この中に、江戸時代の藩医であった早川、片寄、岩切があるのが興味深い。

まとめ

日向の蘭術医の嚆矢者として、岩切孝哲ではなく、彼の養父、岩切芳哲であることを松田仙峽氏の説を墓碑文で確認した。両者の師はいずれも長崎の榊林外科の流れを汲む榊林榮哲(初代)とその曾孫にあたる榊林榮哲(三代)であることが分かった。また、幕末に緒方洪庵の適塾にも学んだ検本源吾が佐土原藩から出ていることが判明。しかし、24歳の若さで戊辰戦争で戦死している。

日向蘭学は、華々しくはなかったが、明道館の設立や種痘の実施などで、大きな働きをしたと思われるが、今は史料が乏しい。今後待つ他はない。

謝辞

本論文作成に当たり、種々文献、資料を頂いた延岡市薬剤師会、大崎春光先生並びに墓碑文、家系図、写真などの史料の御提供を頂いた岩切四方治夫妻に深謝する。

参考文献

- 1) 山本郁男, 宇佐見則行, 程 炳鈞, 岸 信行: 日向薬事始め(その10) - 日向出身の、頼山陽および山脇東洋門下生とその周辺 - . 薬史学雑誌46: 29-37, 2011.
- 2) 山本郁男, 井本真澄, 宇佐見則行, 岸 信行: 日向薬事始め(その7) - 延岡における医学所「明道館」の設立と藩士教育 - . 九州保健福祉大学研究紀要 11: 169-175, 2010.
- 3) 中西 啓, ニッポン医家列伝 - 日本近代医学のあけぼの - . (株)ピー・アンド・シー発行, 2010.
- 4) 長崎大学薬学部: 出島のくすり. 九州出版会, 2003.
- 5) 杉田玄白, 緒方富雄訳: 世界教養全集17 蘭学事始. 平凡社, 1963.
- 6) フリー百科事典, 「ウィキペディア」.
- 7) 社宮崎県医師会: 宮崎県医史, 1978.
- 8) 松田仙峽, 延岡先賢伝. 藤尾印刷, 1956.
- 9) 亮天社出版委員会, 延岡亮天社の概況と周辺. (株)夕刊ポケット新聞社, 1986.
- 10) 延岡市立図書館, 明治・大正・昭和三代に亘る延岡を語る座談会記録, 1950.